

講演「論理的に考え、表現する力を育む — 教員の多様性を活かした“共通教育と 専門教育の接続”に向けて —」

井下千以子

桜美林大学 教授

丁重なご紹介をいただきまして、恐縮に存じます。本日は、どうぞよろしくお願いいたします。創価大学では「自らの考えを適切に表現し伝えることができる」ことをディプロマポリシーの1つに掲げておられるとお聞きしております。また、貴学のホームページを拝見しましたところ、これまで学長の鈴木先生が先頭に立って、文章表現力の向上に全学体制であたってこられたことを知りました。そうした歴史に鑑みると、ここでお話するのも気が引けますが、これまで私が実践してきたこと、理論的に整理してきたことなどを中心にお話することで、なにがしかFDのきっかけとしていただければ、幸いに存じます。

そこで、本講演の題目を「論理的に考え、表現する力を育む」といたしました。現在、創価大学では、共通教育と専門教育の接続が問題になっていると伺いましたので、多くの先生方が授業に携わっている中で、その先生方の様々な能力を活かした形で接続がうまくいくよう、副題を「教員の多様性を活かした“共通教育と専門教育の接続”に向けて」とし、お話をさせていただきます。

講演の概要は、次の4点です。第一は共通教育と初年次教育の理念についてです。初年次教育が学会として立ち上がって15年が経過します。初年次教育の実施率は9割を超え、どの大

学でも取り入れている現状ですが、果たして内実はどうか、統計資料から俯瞰したいと思えます。

第二は、共通教育、初年次教育、基礎教育、教養教育と様々な用語があります。概念が混在した状態をどう捉えたらいいかを一緒に考えていきたいと思えます。初年次教育は1年次の入口だけやればよいということではなく、入口から出口の卒業までを見据えた初年次教育として、学生に何を身につけさせれば、卒業のときにディプロマポリシーを身につけた学生を育成することができるのか。そうした観点から、私の担当する初年次教育の授業を例に検討します。

第三は、専門教育についてです。私の専門は心理学ですので、専門教育の中で、「書く」「考える」ことをどう専門科目の授業で展開させて

概要

論理的に考え、表現する力を育む

— 教員の多様性を活かした“共通教育と専門教育の接続”に向けて —

2

- ▶ 「共通教育」と「初年次教育」の理念
 - ▶ 内実はどうか、現状を俯瞰する
 - ▶ 共通教育・初年次教育・基礎教育・教養教育の概念整理
- ▶ 入口から出口まで見据えた初年次教育
 - ▶ 初年次で学生に身につけさせたいことは何か
 - ▶ カリキュラムに位置づけた授業の展開
 - ▶ 専門教育に共通教育の成果をいかに定着させていくか
- ▶ 共通教育と専門教育の接続に向けて
 - ▶ 教員の多様性を最大限に活かす
 - ▶ 本当のアクティブラーニングとは
 - ▶ Critical Thinking & Writing Across the Curriculum

いるか。初年次教育、共通教育の成果をどう活かせば、大学4年間を通して、学びを結実させることができるかを検討したいと思います。

最後の第四では、共通教育と専門教育の接続に向けてアクティブラーニングのあり方を考察します。アクティブラーニングは多くの大学で取り上げられるようになってきましたが、本質的なアクティブラーニングとなっているか、再考したいと思います。

具体的には、スライド2にもありますように、専門教育と基礎教育をつなげていくため、WAC (Writing Across the Curriculum) やクリティカルシンキングをいかにカリキュラムに展開していくか、理念としてはあっても現実にはどのように学生の力を育ていけばよいかをご一緒に考えていきたいと思います。

スライド3の『思考を鍛えるライティング教育－書く・読む・対話する・探究する力を育む』ですが、これは大学教育学会での課題研究2018年度から2020年度まで3年間に渡る成果として慶應義塾大学出版会より出版されたものです。

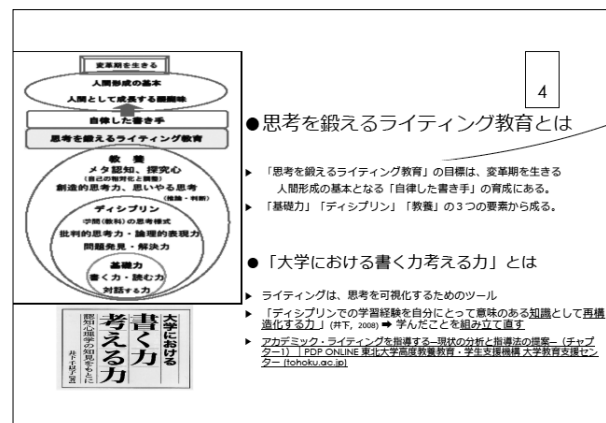
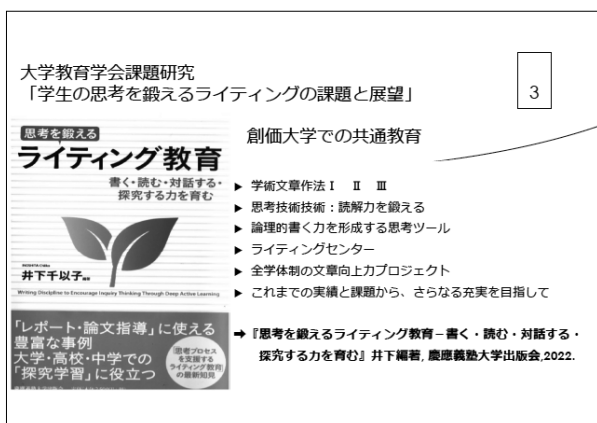
課題研究のメンバーとして、創価大学からは、関田先生はじめ、佐藤広子先生、高橋薫先生、福博充先生が課題研究シンポジウムにご登壇くださいました。大学教育学会の前学会長の小笠原正明先生や、大学入試センターの山地弘起先生もこの課題研究のメンバーです。

本書では、創価大学の共通教育の中で文章表現を充実させていくための科目「学術文章作

法」、読解力を鍛える科目「思考技術基礎」では論理的、書く力を形成する思考技術について、正課教育と正課外教育をつなぐ創価大学ライティングセンターによる文章表現力向上プロジェクトに取り組まれてきた足跡が先生方のご論考として紹介されています。

この度、ご講演の依頼を受けまして、あらためて貴学のホームページを拝見し、取り組みとしてかなり充実している印象を受けました。ここでは、貴学のさらなる充実を目指し、いくつかご参考になることがあればと思っております。

では、本題の「思考を鍛えるライティング教育とは何か」という話に移ります。ライティングといいますと、「書くこと」にまず視点があてられますが、私の研究の出発点はライティングではなくて「思考」、すなわち「考えること」でした。卒業論文は「思考の発達過程に関する研究」で、幼児を対象とした概念学習の実験による検討でした。修士論文も実験で、博士論文になって初めて、質的研究を行いました。看護記録の認知に関する熟達化研究でした。看護学生が一人前の看護師になっていくために、看護記録を書く訓練を受けていくわけですが、その看護学生、新人看護師、中堅看護師にグループインタビューを行い、看護記録を書くことによって一人前の看護師となっていく思考プロセスの熟達化を分析したものが博士論文の一部となっています。これらの研究を通して、「書くことは考えること」であり、「ライティングは思



考を可視化するツール」だといくことを実証してきました（スライド4）。

次に、基礎力・ディシプリン・教養の3つの層で構成する図について説明します。ライティングを、思考を可視化するツールとして、大学教育の中に埋め込むためには、いわゆる書き方の作法やスキルだけではなく、「学問の思考様式」すなわち「ディシプリン」が重要ではないかと思えます。ディシプリンには、訓練という意味もありますが、その構成要素はアカデミック・ライティングの骨格となる批判的思考、論理的思考、問題発見・解決力など、学問で核となる思考力です。その思考力を支えるのが、基礎力としての書く力と読む力です。

その考えて書くという行為を包括的に捉え、方向づけるのが「教養」です。教養があるということは知識をたくさん知っていることだけでなく、その知識を自らに意味づけ、客体化できることです。学問は自らを客体化する一つの手段であり、それを自分の生きるプロセスの中で捉えていくことが教養教育の重要な点であります。自分を相対化し眺めて自己コントロールするメタ認知能力や、実社会や実生活の複雑な文脈や自己の在り方生き方と関連づけて問い続ける探究心、新しい世界を創造する思考力、困難な問題と向き合い、感性を研ぎ澄ませ思いやる思考力としての Caring Thinking など、大学で身につけるべき思考力は広く深いものだと思います。

すなわち、書くことを通して思考を可視化し、自分の書きたいことや伝えたいことは何かを省察することによって、自分の生き方を見つめ直していくことが肝要です。広くディシプリンに学び、文献を読み込み、現実を深く分析し、問いを温め、粘り強く考え抜いて書く力を鍛えるプロセスには、教養を深め、人間として成長する醍醐味があります。それは「変革期を生きる人間形成の基本」となります。この図はその枠組みを表しています。

したがって、大学における、書く力、考える

力というのは、このディシプリン、それぞれの学問分野での学習経験を、ただ先生から聞いておしまいではなくて、自分にとって意味のある知識として、もう一回再考、評価するという力ではないかと思えます。つまり、学んだことを組み立てなおすということです。まず、学ぶ“learn”、そのあと一度学び捨てる“un-learn”、学んだそのままではなくて、様々な状況に合わせてもう一度組み立てなおす“re-learn”することが重要ではないでしょうか。

なお、ここでは主に共通教育と専門教育の接続というところに焦点を当ててお話ししていきますが、アカデミック・ライティングを指導する基本的な内容については、スライド4に示した東北大学の大学教育支援センターのWebページに私の講演がアップされていますので、そちらもご覧いただければと思います。

初年次教育は、今や97%という高い普及率を示しています。初年次教育の主たる目的は、高校から大学への円滑な移行です。新入生を対象にした総合的教育プログラムであり、基礎力の補完を目的とする補習教育とは異なるものです。しかしながら、普及はしたけれども本当に大学教育や大学生活への円滑な移行はできているのか。総合的な教育プログラムといっても、アカデミックスキルに偏ってはいないか。補習教育とは異なる正課教育として普及したけれども、専門教育の段階で基礎力は定着しているのかという問題も散見されます。

初年次教育の具体的な内容を見ていきますと、その多くは学習スキルの習得に関するものです。レポートの書き方、ノートの取り方、プレゼンテーションの仕方など、学習スキルに関するものは非常に高い割合を占めています。一方で、メンタルヘルスや、大学生活における時間管理といった学習生活への移行や適応プログラムは低い割合となっています。

すなわち、現状は学習スキルに偏っています。初年次教育は学習スキルの伝授でいいのかということが問題だと思います。また、共通教

育、初年次教育、基礎教育、教養教育、これらの概念、捉え方が教員の間で共通の認識があるわけではありません。これらの問題を事例から検討していきたいと思えます。

本学では、2007年にリベラルアーツ学群が開設されました。リベラルアーツでは、入学時に専攻は決まっています。メジャー、マイナーは、1、2年で様々な科目を学ぶ中で、自分の専攻を見つけていかなければなりません。こうしたことを踏まえ、1年生のときに基礎力をしっかりと身につけさせることを目指して、基礎教育に取り組むために「基盤教育院」が開設されました。文章表現、口語表現、コンピューターリテラシーの他、学問基礎などが含まれます。その後、先生方から文章表現を履修したはずなのにレポートが書けないといった意見も出るようになりました。さらには、他にも学群(学部)が増設され、キャンパスが6か所に移転し、1つのキャンパスに集まって全学共通科目として初年次教育を運営することが物理的に不可能になりました。基盤教育院は解散し、基礎教育は各学群に任されることになりました。リベラルアーツ学群では「学生がきちんとレポートを書けない」という声を受けて、昨年からアカデミック・ライティングと名称を変えて新しい取り組みが始まっています。

現在、私が所属するリベラルアーツ学群の基礎教育には、スライド7に示したりベラルアーツセミナー、いわゆる初年次セミナーがあります。この初年次セミナーでは主に、大学の学び

「初年次教育」「基礎教育」「共通教育」の概念整理 7

FYEの理念は反映されているか

- ▶ 桜美林大学における基礎教育の変遷から考える
 - ▶ 2007 基盤教育院の開設：全学共通科目
 - ▶ 文章表現、口語表現、コンピューターリテラシー
 - ▶ 2007 リベラルアーツ(LA)学群の開設
 - ▶ 2015 基盤教育院の解散
- ▶ 6つのキャンパスに学群が移転
- ▶ 各学群別の基礎教育へ移行
 - ▶ 主にアカデミックライティング
- ▶ 2021「初年次教育」の記述(は履修ガイドやHPにはない)

▶ 現在のLA学群の基礎教育科目

アカデミックライティング、アカデミックプレゼンテーション、コンピューターリテラシー、英語コア科目、キリスト教入門、教養的思考と論理、リベラルアーツセミナー

▶ リベラルアーツセミナーでは、本学群の学びにふりかかっている理解を深め、Independent Learnerとしての自覚を持つとともに、大学の学びのために必要な知識と学習スキルを修得します。

に必要な知識と学習スキルを習得させることを目指しています。その他に、基礎教育科目としては学問基礎として、いわゆる教養教育科目などがカリキュラムとして配置されています。リベラルアーツセミナーでどんな授業をしているのかということ、ライティングに焦点を当てながらご紹介したいと思います。入口から出口までを見据えた初年次教育ということで、2007年に基盤教育院が開設されたときに、基盤教育院長から、First Year Experienceとして、初年次教育の総合的な内容を含む科目を作りたいと依頼がありました。授業の名称を「大学での学びと経験」とし、2007年から現在まで続いています。

「大学での学びと経験」の授業をテキストとしてまとめたのがスライド9の「思考を鍛える大学の学び入門－論理的な考え方・書き方からキャリアデザインまで」という本です。学習スキルだけではなく、高校生が大学生となって、またその大学生が卒業するときはどうなりたいかを見通すことができるようになることを初年次教育の目標として掲げ、テキストを作成しました。

このテキストは、コロナ禍の2020年5月20日付日本経済新聞に、人生のヒントになる書籍として紹介されました。記事では、「進路や人生を考える手がかりをつかむことができれば、問題意識を深く考え、深められるだろう。粘り強く考えるための大学での学びの大切さは、自らテーマを見つけ考えていく点にある」と掲載されています。まさしくこの本が目指していることを、記者が的確に読み解いており、本書のねらいが明瞭に裏づけられたように思いました。

具体的にその授業内容について解説します。リベラルアーツセミナーではこのセミナーのための委員会が設置されており、共通テキストというのがあります。その共通テキストは使っても使わなくてもいいという自由度があります。共通テキストはアカデミックスキルが主たる内容となっていることから、私としては総合

的な初年次教育を行いたいと思っているので、拙著を用いてスライド9の表に示した授業を展開しています。

まず「学問の扉」についてですが、これはブリッジカレッジという入学前教育を再構成したものです。大学とは何か、学問とは何か。自分の問題関心をどう問いに発展させていったらいいのかということ、大学に入学した学生に向けて伝えます。1年生は学問の入口に立っていて、力強く学問の扉を叩いてほしい。多様な学問と向き合うことで、知の冒険をしてほしいということを1回目の授業の中で学生たちに語りかけます。そしてどのような問いを持っているのかを短い文章にまとめてもらいます。

この科目で丁寧に指導していることは、論証型のレポートを書くことです。データベースによる情報の収集と読解、どの情報を使ったらいいかという判断力、その情報の中から何を読み取り、今何が問題なのかを考える批判的思考力を養います。仮説としての問いを立てて、問いの根拠を構造化し、その上で、自分の主張として結論をまとめて発表するということを6回の授業で行います。

具体的には、テキストに示したフォーマットを使いながら、調べた情報を根拠としてまとめます。さらに見本レポートを参照しつつ、自己点検評価シートを使って、書く前と書いた後でチェックしていくことによって、自分の文章を点検、評価していくことができるという内容になっています。最後にピアレビューで友達と交

換し、優れているところ、改善を要するところを記入してもらいます。

データベースによる情報の検索の収集についてはワークシートを使って、データベースで検索することを丁寧に指導しています。

初年次教育では、論証課題のテーマ設定も重要です。例えば小学生にスマホを持たせるべきか、そうではないか。あるいは高校生は制服にすべきなのか自由化すべきなのか。折衷案も考えられるだろうというように、学生が自らの体験を通して理解できるような論証の課題を与えます。

すなわち、少し前まで高校生だった学生が自分の頭で考えられるような課題が適切です。いきなり学術論文を読むのではなく、スマートフォンという流動的で新しい情報は、論文よりは身近な新聞にありますので、朝日新聞や日経テレコン、ヨミダスなどのデータベースを使って検索するよう指導します。その上でGoogle ScholarやCiNii等を使って論文を読むよう、段階的に指導します。さらに、文部科学省や厚生労働省のホームページも調べさせ、調べた情報を根拠として科学的に説得的に論証するレポートが書けるよう、導いていきます。自分の体験談や感想文ではなく、課題は信憑性を求めるレポートなのだということをまず理解させ、授業で徹底して調べる訓練をおこないます。

調べる力がついたあとで、次に、大学のホームページや履修概要を調べて、自分はこれから4年間何を学んでいくのかを調べさせます。それをもとに、自分はこれから大学で何をどう学んでいくか、アカデミックプランニング・エッセイを書かせます。自立した学習者を目指して、学部を志願した積極的な根拠や、入学した学部の何に魅力を感じ、何を学びたいと思っているか。これから履修したい科目や学習内容、その理由について自分の専攻や将来目指したいことを視野に入れてまとめさせます。このアカデミックプランニング・エッセイも、見本エッセイがあります。たとえばリベラルアーツ学群

入口から出口まで見据えた初年次教育	
初年次で学生に身につけさせたいことは何か	
▶ LAセミナー：共通性と自由度	
▶ 『思考を鍛える 大学の学び入門—論理的な考え方・書き方からキャリアデザインまで[第2版]』(井下, 2020)	
学習項目 (全14回)	学習のねらい
1 学問の扉：学問の世界へようこそ(1)	2008年ブリッジ・カレッジ(入学前教育)に始まった「学問の扉」大学とは、学問とは何か、問題関心をどう問いに発展させるのか
2 自己紹介・他己紹介(1)	自己理解、他者理解、信頼関係の構築
3 論証型レポートを書く(4)	データベースによる情報の収集・読解・判断、批判的検討、問いを立てる、構造化、主張の表現、発表
4 アカデミック・プランニング・エッセイ(2) [第2版]に追加した	大学のHPや履修ガイドを調べ、学群の特徴や4年間のカリキュラムを理解し、自分の学びをプランニングする
5 ライフキャリア・デザイン(3)	過去から未来までの自分をアイデンティティステータスで4分類することで、自分の夢を描き、今後の大学生活での課題を発見する
6 振り返り：学びレポート(1)	半期の授業を省察する
▶ ワークシート、ブレイクアウトセッション (グループワーク、ピアレビュー)、授業外学習	

であれば、題名は「複合的思考と実践力を学ぶ」、キーワードを挙げて、網掛けした接続表現を使うとうまく書けますよということを伝えます。例えば、「リベラルアーツ学群のこういうところに惹かれて入学しました。今、フードロスに問題があって、貧困や環境問題も考えたい。そのためにはまず社会科学に関する科目をとって、自分のメジャーとしたい。履修ガイドにある先修条件や履修単位を踏まえて、履修計画を立てていきたい。」というふうに、ホームページの履修ガイドをしっかりと読み込んで書くアカデミックプランニング・エッセイの指導をしています。

看護学生3年ゼミの見本エッセイも掲載しています。題名は「健康的に生きることを援助する」です。看護学部の大学案内には「看護が人間をより健康的に生きるのを援助する仕事であり、学生たちは看護することの意味と喜びを感じて巣立ってほしい」とあり、とても感激したこと。自分もそうありたいと憧れて志願したこと。しかし、入学後に自分が描いた看護師のイメージと異なり、なぜ理論を勉強するのか、患者さんを助ける実践的な学びをしたいと思っていた。けれども、アカデミックプランニング・エッセイを書き、4年間のカリキュラムの意味を理解することができました。専門的な知識と技術、チーム医療における幅広い知識と視野があってこそ一人前の看護師になれることを知りました。現地実習として本格的な臨床での学習がスタートしました。4年次に向けて自分が将来どんな看護師を目指したいか明確にする必要があります。私は発展途上国における公衆衛生に興味があります。ゴールは保健師の国家試験に合格することです。将来を見据えて海外研修にも参加する予定で英会話のトレーニングも始めました。夢に向けて頑張りたいです。ということを3年ゼミでおこないます。1年ゼミでも、3年ゼミでもアカデミックプランニング・エッセイを書かせています。

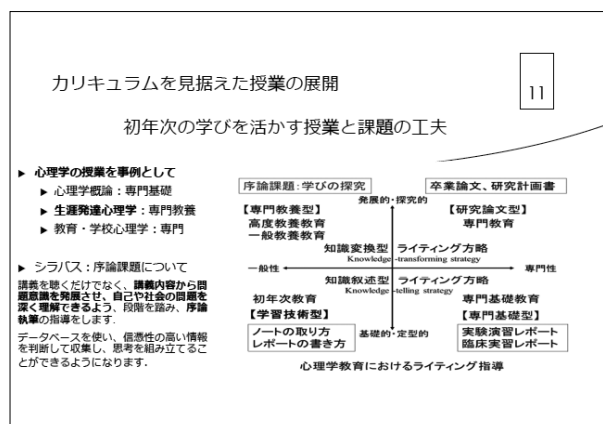
そのあとで、ライフキャリアデザインについ

て考察します。アカデミックだけではなく、ライフキャリアについて、過去から未来までの自分を認識して4つのアイデンティティステータスに分類することで、将来を見据えるということを行っています。

最終回では、この授業に返って学びレポートを書くということを行っています。調べる、情報の真偽、論述など、授業を通して、学生は「人として成長できるカリキュラムであるということがわかった」と述べています。また、「大学の4年間の学びと将来の自分をつなげて考えることは難しかったけど、やりがいや楽しさを感じることができた」とも述べています。

では、次に、カリキュラムを見据えた授業の展開という観点から、私の生涯発達心理学の授業についてお話ししたいと思います。心理学におけるライティング指導を、スライド11に示した図を用いて説明します。この図では、縦軸に「基礎から発展」を、横軸に「一般性から専門性」に示しています。図の下の部分が、知識叙述型ライティング方略によって型に沿って書くことができるものです。上の部分が、知識変換型ライティング方略により、知識を再構築することによって学びを深めることができます。

第3象限には基礎的で汎用性のある初年次教育を配置しています。基本的なレポートの書き方やノートの取り方などです。第4象限には専門基礎教育としての実験レポートや臨床実習レポートを学びます。第2象限では教養科目で学びを探究し、第1象限の専門教育では卒業論文



これは良くないというレポートを紹介することによって、何が悪いのかということを知らせたい。これを学生に考えさせます。

さらに、この授業はレポートの書き方の授業ではなく、心理学の授業なので、心理学の観点からテーマをどう立てたらいいのか。何が問題になっていくのかを考えるよう、指導します。学生の振り返りには、「最初はなぜ心理学の授業で？ と思ったが、自分で資料を調べて書く、試行錯誤しながら考えるプロセスは社会人になっても必要で良い経験だった」「はじめは書き方にとらわれていましたが、回数を重ねるごとに重要なのは自分で問題点を探し、書きたいテーマに関して真摯に向き合うことなのだと知りました」「大学4年間通っていたにも関わらずレポートの正しい書き方を分かっていなかった。論文や新聞などデータベースも初めて利用した。1年生からこの授業を受けていれば留年しなかったのか、とまで思った」と振り返っています。

したがって、初年次では定着しなかった力がついたのではないかと、専門での学びを深めるための思考の鍛錬、情報の判断力の育成につながったのではないかと考えます。すなわち、自立した書き手を育てるには、メタ認知的気づきを促す学習環境を整えることが大切です。初年次での基礎学習の成果を、他の授業で応用するところまで力をつけていくには、様々な授業の中で、問題や課題を出すことは必須です。脱文脈化した未知の課題で、教師が足場作りとしての批判的役割を果たし、思考を可視化する学習ツールや、グループで学ぶ協同学習による協調的なアプローチを授業に取り入れることで、高次の探究学習へと応用的な書き方を学び、自立した書き手、自立した学習者となっていくことができるのではないかと考えています。

最後に、共通教育と専門教育の接続に向け、アクティブラーニングのあり方について再考したいと思います。初年次教育で様々なワークをアクティブに行っていたとしても、2年次以降

に「初年次でやったかもしれないが、覚えていない、使えない」といったことが起こります。教員の側も、共通教材や共通シラバスがあると「自分で授業内容は考えなくてもいい」という受け身的でアクティブに授業内容を考えないことも生じます。そうすると、ワークという外的活動における能動性が働いていても、主体的に能動的に考えることや、考えを深めることに必ずしもつながっているとは言えないのではないかと。なぜなら、内的活動における能動性とは、ワークとして体を動かすとか、話すという目に見えて分かりやすい行動を指すのではなく、自分の頭でじっくり深く考えることであり、ワークを行ったかではなく、ワークを行ったとしてもその中でどう考えたのか、どのくらい考えたかが重要だからです。他方、たとえ一方通行の授業であっても、その先生が学生に深く考えさせるような講義をしたのであれば、内的活動における能動性は学生の頭の中でしっかりと活動していると考えられます。そうすると、アクティブラーニングとして表層的な外的活動を煽る趨勢があるとするなら、本当の意味で思考を深めるアクティブラーニングのあり方を再考する必要があると思います。

たとえば、初年次の教材のテキストの事例や、生涯発達心理学の授業での序論課題の事例のように、教員が主体的に教材や課題をカスタマイズすることによって、2年次以降も初年次での学習を定着させ、専門教育につなげて、能動的に考えさせることができるのではないかと考えます。

教員組織には様々な分野の先生方がいらっしゃいます。共通教育の理解を先生方の間で共有し、専門教育でも、その共通教育でやったことをさらに持続するような課題を工夫していく必要があるのではないかと考えます。もちろん、初年次や共通教育に熱心な先生もいます。一方、教員によっては、どこに基点を置くかは多様です。専門教育のエフォートが高い先生もいます。教員同士でその多様性を認め合い、互い

にリスペクトしていくことも接続に向けて重要ではないかと考えます。そのためには、カリキュラム全体として、大学4年間にわたって「考えて書くこと」を、一人一人の教員が共に取り組んでいくことが肝要です。理念としてはWAC (Writing Across the Curriculum) という概念もありますが、組織として取り組んでいくことはなかなか簡単ではありません。しかしながら、4象限の図に示したようなライティング指導を、教員間で協同して取り組むことによって「共通教育と専門教育の接続」や「大学4年間を通して考えて書く力を充実させていくことができる」のではないかと考えています。ご清聴ありがとうございました。

引用文献

- 井下千以子編著 (2022) 『思考を鍛えるライティング教育—書く・読む・対話する・探究する力を育む』 慶應義塾大学出版会.
- 井下千以子 (2020) 『思考を鍛える大学の学び入門—論理的な考え方・書き方からキャリアデザインまで [第2版]』 慶應義塾大学出版会.
- 井下千以子 (2019) 『思考を鍛えるレポート・論文作成法 [第3版]』 慶應義塾大学出版会.
- 井下千以子・柴原宜幸 (2021) 「論述課題と指導内容に関する高大接続の観点からの検討—中高一貫校の事例をもとに—」 『大学教育学会誌』 43 (1)、23-27.
- 井下千以子・柴原宜幸・小山治 (2021) 「探究学習を企図した専門科目でのレポート指導が批判的思考力・論理的表現力に及ぼす効果—問題と目的—」 『大学教育学会誌』 43 (1)、28-32.
- 井下千以子 (2008) 『大学における書く力考える力—認知心理学の知見をもとに』 東信堂.
- 井下千以子 (2002) 『高等教育における文章表現教育に関する研究—大学教養教育と看護基礎教育に向けて』 風間書房.